

JOMF 派遣医師便り (2016. 3)

◆シンガポール◆

ジカウイルス感染症と防蚊対策

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

はじめに

シンガポール国内ではジカウイルス病の患者は確認されていません(3月12日現在)が、当地はジカウイルスの媒介蚊であるネッタイシマカの生息地域であることから、潜在的な危険は否定できません。シンガポール環境庁は、エル・ニーニョに関連して気温が高いため、蚊の発育が早く、一昨年に比べ蚊の個体数が50%程度増している可能性を示唆する観察結果を発表しています。

ジカウイルス感染症

ジカウイルス感染症に関して、世界保健機構(WHO)は去る2月1日に国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態(PHEIC, Public Health Emergency of International Concern)を宣言しました。

ジカウイルス感染症の広まり

ジカウイルス感染症の発症が人で確認されたのは1952年が最初とされています。その後、散発的な発生があり、2007年頃から、ミクロネシアのヤップ島で流行し、2013年にはフランス領ポリネシアで約1万人の患者を数えました。ブラジルでは2014年末ごろから発疹を伴う熱性疾患が増えていましたが、2015年5月にブラジル北東部でジカウイルス感染症が確定診断され、その後、中・南アメリカで大きな流行^{註1}をみせて、現在も流行が拡大しつつあります。WHOは3月3日時点で、のべ52の国と地域に及んでいる感染地域はさらに拡大するだろうとの見解を3月8日に出しました。東南アジアでは、流行にはなっていませんが、散発的な発生がカンボジア、インドネシア、フィリピン、東マレーシア、タイで認められています。

症状

ジカウイルス感染症は、デング熱に似たウイルス性の熱性疾患ですが、デング熱に比べ、一般的な症状は軽いとされています。

ところが、このウイルスに妊婦が感染すると胎児に小頭症(頭部が小さく、神経障害、知的障害などを起こす治療困難な疾患)などの中枢神経障害や、一般の感染者でも感染者の年齢が上がるほどギランバレー症候群(脱力などの神経障害が現れ10-20%の症例では呼吸の補助が必要になる。死亡例は少ないものの皆無ではない)という神経疾患が増えることが強く疑われており、今後の調査結果を注視する必要があります。

治療

特効薬やワクチンはありません。対症療法、サポート的な療法となります。

感染様式

感染を媒介する蚊はネッタイシマカやヒトスジシマカなど数種のやぶ蚊類で、これはデング熱やチクングニヤ熱を媒介する蚊と同じです。つまり、シンガポールには潜在的に感染

が広まってしまう素地があるということです。ちなみに、デング熱に似たチクングニヤ熱は今でこそシンガポールに定着していますが、シンガポール国内発症の第一例目の確認報告は2008年の1月です。その年は700名弱の患者報告がありました。以後、毎年、数百名から千名程度の患者発生が報告されています。

対策

WHO、日本やシンガポール政府も妊婦は流行地域へは出来るだけ渡航しないようにとの勧告をだしています。また、性行為によって感染する可能性も否定できないことから、WHOは流行地域から帰国した男性で、特に妊婦のパートナーがいる場合には、パートナーの妊娠中は、症状の有無に関わらず、性行為にはコンドームの使用や、性行為の自粛を勧めています。また、流行地域からの帰国者には帰国後少なくとも28日間は性行為の自粛または安全対策を行うことを勧めています。

今年は感染が広がっているブラジルのリオデジャネイロでオリンピックが開かれます。開催時期の8、9月はリオデジャネイロでは冬に当たる時期ですが、現地の8月の最高気温の平均は24度、最低気温の平均は18度とのことです。ネットアイシマカの至適発育温度^{註2}は23.1度(意外に低い!)とする研究報告もあることから、十分に蚊は活動できますので、渡航者は防蚊対策をしっかり行うことが大切です。防虫剤の効果には多くは期待できないとする報告もありますが、きちんと使用したほうが無難でしょう。WHOはDeetやIR3535又はPicaridinを主成分とするものを薦めています。

また、感染が広がっている地域に渡航しないシンガポールに居住している私達も、万が一、感染の飛び火が起きても慌てないように普段から病気の素地となる蚊を増やさない意識を持つておくことが大切です。今、喧伝されているデング熱蚊対策を行い、蚊の発生源となるような水たまりを作らないようにしましょう。家庭では花瓶の水は2日に一回は取り替える、鉢植えの皿の水を捨てる、トイレは蓋をしておくなどの対策が薦められます。排水口にもできる限り蓋をしておくといいでしょう。特に長期の旅行をする時にはこれらの対策をしていってください。もし、お住まいの地域でデング熱が多く発生すれば、当局は、居住者と連絡が取れない場合でも、調査のため、居住地に入ることが法律で認められています。もし、そこで蚊の発生源が見つかるとう罰金が科せられますのでご注意ください。

デング熱の対策として、政府は国をあげて、蚊を増やさないための対策(Mozzie Wipeout Campaignなど)を行っていますが、昨年10月末からデング熱の患者数が増えており、今年は、2013年の史上最多記録を更新しそうな勢いです。蚊の発生を完全に抑えることは困難ですが、それでも、居住者一人一人が、蚊を増やさない努力を続けて行くことが大切だと思います。

(尚、本稿は2016年3月12日発表までの記事を元に作成しております。)

註1 ブラジルでは2015年に40万から130万人の患者発生があったと推測されています。

註2 体の大きさと発育速度は至適発育温度に大きく関係するという研究結果があります。一般に気温が高めなほど発育速度は速くなりますが体の大きさは小さくなります。体の大きさが小さくなることは他の種との生存競争の面から不利になりますので、ある程度体は大きいほうがよいと考えられます。気温が低めであれば体は大きくなりますが、発育に時間がかかることになり、結果として個体数が増えにくくなってしまいます。